＜随想＞

コミュニケーション学科の誕生まで

植村　勝彦

その日，1985（昭和60）年10月30日は，全国の短期大学に初の，わが愛知淑徳短期大学コミュニケーション学科の誕生に向けて，僕に確信と勇気と，さらには一種の闘争心を与えてくれた日であった．

夕方５時近く，文部省３階の，薄暗いＡ会議室で始まった聴聞会，つまり大学設置審議会による「大学等設置認可申請に係る説明聴取」は，わがコミュニケーション学科の設置の趣旨，必要性，および基本構想などについて，文部省に説明し，質疑に答えるもので，設置審側は大学の学長クラスの４委員，学園側は小林素三郎理事長・学長以下６名であった．席上いろいろな注文，苦言もついたが，学科の基本構想を説明した僕に対し，主査を務められた久野　洋委員（慶応義塾大学教授）は，好意的な評価を下した後，次のような発言をされた．「このカリキュラムが，大学院修士課程のためのものなら，双手を挙げて賛成しよう．しかし，高校を出たばかりの者に対してでは，消化不良をおこさせはしないか．何を学んだか，じゅうぶん理解しないで卒業することになりはしないか」というものである．この一言は，それまで，短期大学におけるコミュニケーション学科のあるべき姿と目指すべき方向について，いまひとつ自信がもてず，絶えず不安に苛まれていた僕に，このうえない励ましであった．つまり，わが学科の基本構想が，学問領域の異なる専門家にも理解されうる一般性をもち，ひとつのまとまりをもったカリキュラムの体系をなしていると判断され，オーソドックスな教育・研究を志向していると認定されたからである．短大という性格上，目新しく楽しそうなメニュー（科目）を総花的に並べるほうが学生が喜ぶのではないか，科目の構成が研究志向的に過ぎるのではないか，心理学に偏り過ぎてはいないか，などなどと思い悩んできたこれまでに，今日で終止符が打てる．あとは，学生に消化不良をおこさせないように講義や演習のスタイルを工夫することだ．スタッフ全員で，これに挑戦していこうではないか．これが，その時の偽らざる心境であった．学科開設に先立つこと１年半前の出来事であった．

今，これが成功しているかどうか，についての自信はまだない．残念なことに，僕に勇気を与えてくださった久野先生は，今年（1988年）５月お亡くなりになった．一期一会というけれども，僕の胸に強烈な印象を残して逝かれた，先生のご冥福をお祈りするものである．

◇◇◇

よいか」と問うたところ，「前者がよい」とのことだったので君を推薦した，というものであった．白羽の矢をたててもらったことは光栄であったが，今の仕事とはずいぶん違う内容なので，一夏悩み考えた．その結果，学科を創設するというような役割は願っても与えられるものではないし，新しい仕事に挑戦するには年齢的にも最後のチャンスだろう．そしてまた，これもなにかの因縁かもしれない，と感じて決断したのが10月初旬だった．

因縁というのは，僕の尊敬していた伯父が，小林素三郎学長の小学校時代６年間持ち上がりの担任教員で卒業後も，伯父の死ぬまで半世紀以上も同級会が続けられ，死後，学長が中心となって追悼集（「一力二力三力」）まで編まれるという，稀にみる麗しい師弟関係が続けられていることを，ずっと以前より知っていたことである．小学校時代の恩師をこれほどまでに遇してくださる人に，親族の一人として感謝していたしこの人に自分を託してみるのもよいかもしてない，と一種の賭をしてみる気になった．生前，「淑徳なら，口をきいてやってもいいぞ」と冗談半分に言われていたことが，こういうかたちで現れようとは，縁とはこういうものをいうのかもしれない．

ともあれ，決断した僕はＴ氏にその旨を伝え，1984年11月10日，学長をはじめとする学園関係者と千種の愛知会館で初めて会い，正式の依頼を受けた．学科の構想をはじめ，担当教員の人選に至るまで，一切を任せるというものであった．ここに，それまでの準備委員会は解散し，以降，僕に委ねられることになったわけである．42歳の若輩の身に，言い知れぬ不安と興奮が襲ってくるのを，どうしようもなかったことを覚えている．

◇◇◇

は，四年制大学に常磐大学人間科学部コミュニケーション学科があるのみで，短期大学にはもちろん存在していなかった．ただ，南山短大の人間関係科をはじめ広報学科，マスコミュニケーション学科など，類似の名称のものがあり，それらとの違いを明確にせよというものである．

第三は，学科の枠組み．コミュニケーションの定義づけ，学科の到達すべき狙い，カリキュラムの分類と構想，卒業生の進路・資格など，を明示せよというものである．

これが本当の意味の作文の試練だと直感した．学園側の，年明け早々の１月７日に原稿が欲しいという要求に，それからの10日間はそれこそ寝食を忘れての，無い知恵を搾り出して苦しんだ毎日だった．この時，僕はまだ愛知県の職員で，公私混同もいいところであったが，元旦恒例の研究所の所員挨拶会もそこそこに正月休みを返上して，毎日研究室で夜10時頃まで頑張っていたことを思い出す．この公私同居の二重生活は1986年４月に僕が短大に着任するまで，まだ１年以上も続けられることになる．今でこそ明かせるが，このコロニーの研究者としての本来の職務を十全に遂行しない行為で，県と研究所にはずいぶん迷惑をかけたことを申し訳なく思っている．

ともあれ，苦心惨憺して作りあげた原案は，学園側との協議で微修正され，さらに，その他の必要書類も整えられて，1985年１月24日再三度提出された．この原案は，ほぼ現在のコミュニケーション学科の骨格を現しており，したがってまた，これによって学科開設への目途もついたことになる．カリキュラムについては，常磐大学のそれを主に参考にさせてもらった．その後３月までに，まだ数度文部省との折衝が行われたが，基本線はほとんど変わっていない．この間の最大の焦点は学科名称の件で，学園側が，名称変更はそもそもの学科設置の趣旨にもとるとして，頑として説得に応じない姿勢をとりつづけたために，文部省側が折れたものである．僕としても，努力が報われた気がして本当にうれしかった．そして，このコミュニケーション学科は，教養学科に準ずるものとして位置づけられることとなった．つまり，これによって専任教員定員８人（うち３名教授），図書5000冊，雑誌25種類などの最低基準が課せられることになった．

こうして，３月までに，どうにか展望を拓くことができたが，気持ちに余裕ができたとたん，思わぬ伏兵が僕を待ち受けていた．３月初旬のある夜半３時頃，余りの痛みに目が覚めた．腋から背中一面に激痛が走り，寝返ることはもちろんのこと，体を動かすことすらできない．夜中に家族を起こすこともはばかられ，脂汗にまみれてそのままの姿勢で夜を明かした．朝，家内に背中を起こしてもらってどうにか立ち上がり，激痛をこらえて出勤する．しばらくすると痛みは和らぎ正常にもどって，日中は通常通り仕事をこなす．その夜，運動による単純な筋肉痛かと思い，風呂で体をよくほぐして寝ると，再び夜中に激痛で目が覚める．この繰り返しが１ヶ月ほど続いた．内科の医院を二，三軒歩いたが，どこでも血液を200ccずつとられ，また尿検査をしてくれるものの，原因不明で診断は下らず，挙句は，力士が貼っているような巨大な湿布薬をくれるだけであった．そして，またある朝，忽然と痛みはひいていた．狐につままれたような心境だった．後から思ったことだが，神経性の筋肉痛で，これが世にいう心身症というヤツかな，と勝手に納得したようなことであった．ストレスのかかっている最中ではなく，タイム・ラグをおいて現れるものらしい．ともあれ，忘れることのできない“痛い”思い出である．

◇◇◇

彼の指導教官であるＴ教授の研究室で初めて顔を合わせた．学部時代，アメリカン・フットボールをやっていたという，いかにも馬力のありそうな好青年であった．

僕はといえば，もう12月初旬の段階で，２人の人を頭に描いていた．永田忠夫先生と新美明夫氏である．永田先生とは，名大教育学部で同期の助手を務めて以来の15年来の研究仲間であり，僕にはないものを沢山持った素晴らしい人物であることを，常々羨んでいたほどであったので，彼の協力を真先に頼んだ．当時，彼は愛知県立看護短期大学の助教授であったが，大学が冬休みの直前のある日，コロニーとはＪＲ中央線高蔵寺駅を挟んで反対側に位置する彼の学校へ行き，電話でも来訪の目的も告げずに来た僕をいぶかしがる彼に，いきなり「今日は，君を買いにきた」と研究室へ入るなり言ったことを思い出す．

一方，新美氏は，僕とは同じ研究室の同僚で，この10年間，２人でペアを組んで同じ研究を続けてきた間柄である．京都大学を卒業して愛知県の職員となった彼が，配属されてきたコロニー研究所での入所当初は先輩面をしていろいろ指導したこともあったが，出藍の誉れ高く，知らぬ間に凡才の師匠を追い越して，これまた，僕の協力者として無くてはならぬ人となっていた．1985年の新年早々に，内々に移籍受諾の返事をもらったと記憶している．

最後の１人が廣岡秀一氏であった．当時，名大教育学部の博士課程後期２年在学中で，コンピュータに強い社会心理学の院生，ということで名前も顔も知っており，言葉を交わしたこともあったが，友人に候補者を依頼して推薦されるまで，迂闊にも僕の頭に浮かんでこなかった．得難いキャラクターの持主で，現在の学科の雰囲気づくりにどれほど貢献してもらっているか，計り知れない．承諾を得たのは，確か６月に入ってからのことだったと記憶している．

こう書くと，いかにも順調に人選が進んだようにみえるが，本当は必ずしもそうではない．いろいろな曲折を経ての結果である．ただ，今振り返って思うに，この現在のスタッフが，結果的に最高の人的構成になったと自信をもって言える．

こうして，４人の内諾を得て，いよいよ本格的に，そして具体的に，学科創りに取りかかることにした．そしてまた，学園側に一任していたメディア論関係の田村新次，遠藤雄久のお２人の先生についても，ほぼ同じ頃承諾を頂いた．ただ，実際にこの６人の人達が着任するのは，これより更に２年後の1987（昭和62）年，すなわちコミュニケーション学科開設の時である．

◇◇◇

Ｓ６のいわゆる全学共用の部屋は無く，わが学科のみの空間利用としている．つまり，２階のフロア（現在のコミュニケーション・ホール）だけで完結しているものであった．

その後しばらく，学園側から部屋の話は無かったがその間，教授会ではいろいろ議論があったようである（なにぶん，僕はまだ着任していないので，情報が入らない）．後から聞いた話を要約するに，英文・国文学科では小さいゼミ室を沢山欲しいといい，教務課では中教室を要求し，学生部では会議室や学生・教職員の談話室をというように，学科新設に伴ってできる空間獲得に，それぞれの思惑をからめての発言や私案があいついで，収拾に手間どったということである．こうして，結果的に短大側は学長一任と言うことで教授会の了承をとりつけ，我々の案が学園側に提出されたのは，年も替わって，1986年３月17日であった．

その日，学長臨席のもとに，教授会構成員の２氏の私案，および学園の建築関係一切を請け負っている竹中工務店の案と共に我々の案が議論されたが，僕がその席で訴えたのは次のようなことだった．わがコミュニケーション学科は，心理学をベースとしてカリキュラムを構成しようとしている．この構想は，学園も承認済みだと思うが，ところで，心理学は実験科学である．実験には，その目的に則した固有の演習室が必要である．家政学科に，調理や被服に専用の部屋が必要なことと同じである．本格的な心理学実験をこの学科で行うつもりは毛頭無いが，講義のできる一般教室さえあればよいという考え方は，是非とも訂正していただきたい．我々の設計図案，とくに４室の演習室構想が崩れては，そもそものカリキュラムから作りなおさねばならないと．この説得にほぼ同意いただき，しかし，他学科の要求も一部加えることで，ほぼ現在の部屋の配置になった．

ここに到るまで，当初の４人はもとより，後に参加した２名を含めて，４つの演習室とコンピュータ室はそれぞれの担当教員の責任において基本設計され，アイディアが生かされている．新美氏によるコンピュータ室をはじめとして，永田氏案のＳ２面接室の舞台や廣岡氏によるＳ３・Ｓ４の演習室のパーティション装置，山田氏のＳ５のプレイルームや，松尾氏のＡＶ関係と視聴覚室，さらに，ついでに言わせてもらえば，僕の主張になる学科準備室のミーティング・コーナーなどがそれである．これを原案として，実施設計を担当された竹中工務店の中野氏による専門家の意見を加えて，４月８日中野氏提出の図面で合意に達した．内部の取りつけ家具については，これまた学園取引先の富田木工の，４月28日の設計図で同じく合意に達している．もちろん，その後も微細な手直し作業は行ったが，建物については我々の手を離れて，審査第２年次の1986（昭和61）年の夏休み以降，実際の工事に委ねられることになる．

一方，部屋に入れる機器や備品類に関しては，学科全体に係わるものについては僕が，その他については各担当者が，カタログを調べたり，専門業者の意見を聞いたりして，リストアップした．ワンセット何百万円もする機器を決める時など，自分の実生活での消費行動とは余りにも違うため，失敗が許されない緊張と不安にずいぶん苛まれた．とくにパソコンの機種選定では，大学の図書館情報学科がTOSHIBAという実績をもっていたので，新美氏はNECのPC-9800シリーズを導入することを，ずいぶん迷っていたようだった．

これら，部屋の設計や，設備・備品の詳細なリストさらに言えば，カリキュラムやその担当者の配置などは，本当の審査は，第２年次になされるのだが，第１年次の審査にもその概要を提出しなければならない仕組みになっているので，早くから決めざるをえないのである．つまり，第１年次の計画と第２年次のそれとの間に大きな食い違いがあると，設置計画そのものが杜撰であると認定されて，最終の合格が覚束無くなるわけである．ともあれ，学科設置にかかわる予算の大要を文部省に提出することのために，急がされたわけであった．

◇◇◇

においても，1961（昭和36）年開設になる既設の３学科はこの地方での高い評価をえてきているので，このハードの部分での審査は心配していなかった．

こうして，冒頭に述べた，大学設置審議会による審査の日を迎えた次第であった．さらに，その９日後の1985年11月８日，今度は私立大学協会審議会の審査が同じく文部省私学行政課で行われた．私大審側は２名の委員（私立大学理事長），学園側からは前回とほぼ同じ６名が出席した．ここでは学生確保の見通しや学園の財政状況の説明など，経営に関する審査なので，僕はただ同席していればよかった．

1986年３月22日，第１年次審査合格の通知が届いた．

同じく３月，僕は，11年間勤めた愛知県コロニーを退職して，1986（昭和61）年４月愛知淑徳短期大学に着任した．１年後の新学科開設に向けて，その準備に専念するためである．山田先生を除く他の諸氏よりも一年早く，本学に来たのであった．これまで，喫茶店や短大の事務室などで打ち合せをしていたような流浪の生活ではなく，本拠地を持てることはお互いの連絡にとても都合のよいことであった．こうしてやっと，１年半近く続いた公私同居の二重生活に終止符を打つことになった．

学内では一般教育科に籍を置いて，心理学の講義を担当するかたわら（他の教員の持ちコマ数の半分にしていただいた），当面は，第２年次審査の書類申請に必要な作業をすることであった．

◇◇◇

学科の教室となる施設を，授業内容の説明を加えながら案内した．園芸学専攻の学長で，理科系ということもあってか，心理学における実験とはどうやるのかとか，実証されたと判断できるには何が必要か，など歩きながら盛んに質問されたことを覚えている．この学科に興味をもって下さっていることが伝わってきて，これならうまくいくぞ，と心中密かに喜んだ．この時点で，夏休み早々から始まった工事はほぼ終わっていたが（完了したのは11月下旬），パソコンや，ＡＶ機器など設備・備品類は，未だ搬入されていなかった．

また翌日には，文部省私学行政課による「寄付行為変更に関する宅地調査」が行われた．

ともあれ，こうした日々を無事に済ませてホッと一息ついたものの，事態は最後の大きな山場にさしかかっていた．すなわち，先の教員審査で不合格となった人の担当科目の交替要員を，大至急見つけて補充しなくてはならないのである．10月17日が，それの文部省への書類提出締切日であった．これに該当するのは，一般教育科目も含めて全部で10科目６人であった．９月９日の，審査の結果通告より僅か１ヶ月余りしか時間の無い中で，僕が受け持ったのは４人（５科目）であった．他の科目の人選は，学園側に委ねた．ともかく，運よく見つけて本人の了承をとっても，それから手間のかかる書類を作成してもらい，さらにそれを正規の印刷にまわさねばならない．いくら急いでも，この間10日は見ておかねばならないので，人探しに当てられる期間は25日が限度であった．この時ほど，人脈の有難さを痛感したことはなかった．僕の友人や先輩・先生はもとより，妻の知人までをも総動員しての，短期決戦であった．

この大騒動の過程で得た教訓は，生意気な表現ではあるが，大学設置審議会の専門委員の目は，やはり節穴ではないということであった．つまり，本人から提出された業績を予め僕が拝見した段階で，これは危ないなと思った人は，やはり審査で落ちていたからである．後で慌てふためかないためには，最初から，該当科目に確実に合格しそうな人を用意すること，あわよくばという甘い期待で人選しないこと，これに尽きるようである．

◇◇◇

我々２人をそれぞれのペアの責任者として，他学科の先生を応援に頼んで２組のチームを作る予定であったが，それができなくなってしまったわけであった．やむをえず，僕の組を除くもう１組は，他学科の先生だけでお願いすることになったが，内推，外推の両試験とも変則形態となってしまった（もちろん，次年度からはコミュニケーション学科専任の教員だけでまかなえるようになった）．

これに続いて，２月８日には，他学科と同じ日程でいわゆる入学試験を行った．こうして，慌ただしかった新設年度の入学試験もどうにか一段落を迎えたのであった．後は合格者の判断を待つだけで，入学式に何人集まるか，祈るような気持ちの毎日であった．

◇◇◇